

博士論文要約

Summary of Doctoral Dissertation

柏崎の人びとの「サイレント」と「発話」

-原発震災後の日本におけるアレントの活動論再考-

Silence and Speech of Ordinary People in Kashiwazaki:
Applying Arendt's Theory of Action in Post-Nuclear Disaster
Japan

国際基督教大学大学院

アーツ・サイエンス研究科

Presented to

International Christian University
the Graduate School of Arts and Sciences

2020年4月8日

April 8, 2020

前 田 り さ

MAEDA, Risa

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災（以下、3.11）後しばらくして、東京在住で英文経済記者だった筆者は、仕事とは別の機会に新潟県柏崎市へ出かけて行った。原子力発電所として世界一の発電容量をもつ東京電力柏崎刈羽原子力発電所が営業運転を開始して約30年、送電線でつながるまちとそこで暮らす人びとのことをほとんど知らなかったからである。その時たまたま声をかけた地元の男性とのやりとり¹がうまくいかなかったことが気がかりとして残り、2014年後半から柏崎と東京の間を不定期ながら行き来し始めた。

筆者が当初聞いたのは、柏崎では長年、原発の推進側の「われわれ」²と反対側の「われわれ」とに分かれた大きな声（以下、「われわれ」発言）はよく通るが、大勢は「サイレント」³であるという指摘だった。だが、2つの「われわれ」発言とは異なるタイプの市井⁴からの声が、次第に筆者にも聞こえてきた。たとえば、その建設期に子どもだった自分たちの世代が原発のあるまちでどのように暮らしてきたかを表現したエッセイを発表した柴野裕治の声である。小諸・藤村文学賞大賞を受賞したその作品を書くきっかけは、3.11後、マス・メディアが報道するのは東京電力への紋切型の批判の声ばかりで、発電所と関係する職場で働く同世代の意見が掲載されないことだったという（2014年9月3日）。

発電所を何と関連付けるかは、「みんなのおのおの」で異なっていて当然である。柴野のエッセイ「ひばり」⁵は、同じ地域に暮らしていても各々の〈居場所〉によって〈事情〉が異なることを明らかにすると同時に、「柏崎というまち」についての〈情景〉の重なりを探る作品である。他方、地元は安全という長年の〈世界観〉から離れて、住民避難の可能性が〈いま・ここ〉⁶にあると公の場で口にし始めた人びとも出会った。不安があってもそれまでは口にせず「わかっていることに目を塞」いできたのは、現実に向き合うのは「怖いしつらい」〔竹内 2016a〕からだという。一方は日常に、他方は非日常に焦点を絞っているが、どちらの言論・活動も過去の自分についての語り直しを含む点は共通している。

3.11後、経済界に対する配慮を優先して再稼働を承認した立地自治体の首長は少なくない。だが、前市長の会田洋は、2012年度から3年間の「明日の柏崎づくり事業」を立ち上げ、そのうちの1つのシンポジウムのあいさつで、地元の経済を脱原発依存へ転換するのはいま、と呼びかけた〔会田 2014〕。この呼びかけには、市史上3度目の発電所の全停止—2002年の東京電力のトラブル隠し事件を受けた国による停止命令、2007年の中越沖地震

による被災、3.11 後——などの柏崎に特有な背景があった。柏崎刈羽地域には、商工会議所、市民団体、行政区などの代表によるこの国で唯一の住民による原発の監視組織がある。そこでの毎月の定例会では、東京電力や規制当局などの専門知を案ずる⁷議論が続いている。

さて、ここまで、3.11 後の柏崎で筆者が見聞きした人びとの言論・活動の一部を例示してきた。このような場面に居合わせたり、地元の人びととの対面のやりとりの相手になったりした筆者が抱くようになった疑問がある。それは、「サイレント」であることを止めただけでなく、従来からの「われわれ」発言とは異なるタイプの声をあげた柏崎の一部の人びとは、なぜ、どのようにしてそれを行ったのか、という問いである。なぜなら、このような人びとは稀だからである。ここで比べているのは、1945 年の核兵器使用から始まった「核の時代」の 70 余年間、「核エネルギー」に関連する諸問題をくいま・ここ>の問題としてほとんど扱ってこなかった、専門家や政治家ではない私（たち）⁸である。

本論文では、1950 年代後半、核兵器を始めとする当時の最先端の科学・技術の利用方針をいわば仲間内で決定している専門知を案ずる知の主体を市井の人びとにもとめて、ハンナ・アーレントが論じた「複数の人間 (men)」による「活動 (action)」に関する理論 (Arendt 1998) を、上記の問いを解くいとぐちにする。なぜなら、その理論が光を当てたのは、「われわれ」発言にありがちな相手を説得したり動員したりするための手段としての活動ではなく、対等な関係性において互いの異なりを理解し合うことを条件に、自分は「誰か (who)」を相手に開示する言論と相伴うことを目的にして行う「活動」だからである。

アーレントによれば、上記の目的に達するには多くの差し支え (many frustrations) が存在するが、「人間らしい複数性 (human plurality)」のもとでそれらに対応する「複数の人間」なら誰でもその「活動」の主体になるという。このような活動論を援用するこの論文は、次の 2 つの特徴をもつ。第 1 に、ここまで、くいま・ここ><居場所><事情><情景><世界観>と書いてきたように、私（たち）の活動について分析する諸概念に日常語を用いることである。この点は、日本という文脈で「サイレント」から「発話」までの過程を明らかにするという本研究のめざすところの一端でもあるが、詳しくは本文で述べる。第 2 に、「発話」までの過程をさぐるときに用いるデータは、3.11 後の柏崎で筆者が見聞きしたこととともに、同時期に「発話」の失敗と成功を経験した筆者自らの内的な状況と自らと相手のいる場面の状況についての記憶の語り直しを含めることである。

序章

研究の目的と動機

私（たち）のいる地球の時間と各々の生活の場は「核エネルギー」につながれているといっても過言ではない⁹。だが、「核エネルギー」に関連する諸問題について、「われわれ」で安心したり「わかっていることに目を塞」[竹内 2016a] いだりして、波風が立たないようにする場合は少なくない。これは、創発性¹⁰において不毛な文化的な土壌といえる。このような土壌を耕すことが可能だとしたらその「わざ」¹¹の手がかりは、周りのみんなの状況や各々の内的な状況に対応する人びとの知恵にあるのではないかと見当をつけた。なぜなら、柏崎の一部の人びとは、3.11 後の「本音」¹²を各々で異なる生活の場から語ることで「違いを認め合う人と人との交流」¹³を実現したように見受けられたからである。

本論文の目的は、3.11 後の柏崎の一部の人びとは、なぜ、どのように「柏崎というまち」を改めてテーマにする「発話」に至ったのか、を明らかにすることである。

注目するのは、3.11 後の柏崎において筆者が見聞きしたり直接の相手になったりしたやりとりのうち、「サイレント」であることを止めた地元の一部の人びとが行った、「われわれ」発言——仲間内での「同調」のためか、おもてでの原発推進/原発反対の優劣や人数を競う「競争」のため¹⁴の発言——ではないタイプの発言である。そのような発言を可能にする一般的な条件をさぐるときに参照するのは、1958 年に出版された『人間の条件』において、制度政治とは異なる「可能性の」政治の始まりが「複数の人間」の基本の「活動」——その目的は自分が「誰か」を相手に開示する言論と相伴うこと——にあるとしたアーレントの、この章の後段で定義するところの「発話」についての議論である。

研究の方向性について述べれば、3.11 後の柏崎の「誰もが」¹⁵係る<いま・ここ>の問題について一部の人びとが行った言論・活動が「発話」であることを、直観的にではなく、アーレントの「発話」についての複眼的な議論を日本という文脈に援用して「サイレント」から「発話」までの過程についての試論を組み立てた上で、それに基づいて跡付けるという方向である。話者と相手のいる場面の**状況**とその場面の各々の内的な**状況**に分けて「発話」までの過程を示すその試論に基づいて実際の「発話」事例を説明することで、「核の時代」のこの国の大勢が沈黙しがちな「日本における原発」や「核兵器のある世界」などの<いま・ここ>の問題をめぐる「発話」が成立する条件が明らかになる一助としたい。

この研究のもう1つの方向性は、『人間の条件』のプロローグで、科学・技術の最先端の成果物を喧伝する職業政治家や職業科学者の専門知を前にして沈黙しがちな市井の人びとは、本来、誰もが知の主体として自分が「誰か」を表現することができるかと論じたアーレントに倣い、本論文ではそのようなく市井知の可能性をさぐるという方向である。なぜなら、柏崎の人びとは、住民代表が自主的に運営する「柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会」（以下、「地域の会」）が行ってきたことを知っているからである。

今回の研究で3.11後の柏崎の人びとの「われわれ」発言ではない証言の成り立ちを理解しようとした主な動機は、2013年11月18日、「これからの柏崎とエネルギー」をテーマにジャーナリストの池上彰が行った柏崎市主催の講演会の終了後、隣席の男性とのやりとりで筆者が失敗したという、次に述べるような出会いにある。講演会について「どう思いましたか」と尋ねたところ、男性は鉛筆で書いたメモを内側に2つ折りしたものを無言のまま差し出した。そのく身体の表現に虚を突かれた筆者は、動揺してお礼を言うこともできずにその男性を見送った、という出来事である。研究の第1の方向性である、私（たち）の言論・活動を促進/抑制する状況/情況について複眼的にさぐることは、このやりとりが失敗に終わった理由をあとで考えたときから始まっていたと考えられる。自分のく日常をもちこんでいたのではないか、そのふるまいを理解しようとする自分のく経験を参照したが時間切れになったのではないか、などと振り返らずにはいられなかったからである。

もう1つの方向性である「可能性の」政治を市井で担うための一般的な要件について意識したのは、このような出会い方をした60代の男性Aと連絡を取り合い、数か月たって柏崎を訪れたときのことである。自宅に招かれて夫人と3人で雑談をしたときに「地域の会」の広報誌『視点』を手渡された。そのことから、原発に反対、中立、賛成の異なる立場の住民が同じテーブルを囲む、他の立地地域にはない「地域の会」に改めて興味を抱いた。

主要概念の紹介

この論文の主要概念は次の4つである。話者が一人称で「発話」と認識する場合、相手——特定な誰か、不特定な誰か、自己内対話の相手——とその場の第3者が「発話」と判断できる場合、の2通りに定義する「発話」、話者と相手がいっしょにいるくいま・ここ>、くいま・ここ>の問題をテーマにした市井でのやりとりから各々に蓄積されると筆者が考

える<市井知>、そして、仲間内ではほとんど気にならないが、他の場面ではその異なりに気づいて揺らぐことが少なくない、私（たち）の外界認識に関わる<視座>である。

アーレントは、「複数の人間」がその「瞬間」に向かい合っている相手とやりとりする「言葉」がふさわしいかふさわしくないかを判断できる誰もが、「見つける」という動作で活用できる一般的な能力こそが本来の「活動」であるという(Arendt 1998, 25-26)。彼女が他の活動から区別したこの「活動」を、本論文では一語で表現して「発話」とする。

「発話」第1定義：ふさわしい瞬間にふさわしい言葉を見つけるという活動

さらに、アーレントは、「人間らしい複数性」——それは「対等と異なりという二重の特徴 (the twofold character of equality and distinction)」をもつ——のもとで、「複数の人間」は単に異なるのではなく、互いの異なりを契機に「主体性 (initiative)」を発動して、言論と活動の様式で自分が「誰か」を開示せざるを得ない、という(Arendt 前掲, 175-184)。そこで、第1定義の「発話」を認識した話者が、相手もそれを行っているかと察する場合どのように受け止めるか、そして、両者の「発話」が成立したと第三者が判定する場合にどのように見えるか、を表現する「発話」を以下のように定義する。話者と相手が<いま・ここ>でいっしょにいて交流するとき、各々が互いのことを理解すること、そして、各々に生まれる内面の変化を感じ取ることを「学び」と表現した。

「発話」第2定義：話者と相手が対等なやりとりを通して互いの異なりから学び合うこと

この論文における<いま・ここ>の定義は、以下の通りである。比喩的にいえば、<いま・ここ>には、別の時空間に向かう「始まりの扉」がいくつかあり、扉の開/閉の選択は話者に任されている。そのような扉の1つが、「発話」の成立であると考えられる。

<いま・ここ>：時間と空間の2つの方向性を意識した話者が自らの認識を見直すことで、それまでとは別の時空間の方へ向かう始まりになり得る瞬間

この論文で以下のように定義する〈市井知〉は、伝統的に出版によって専門分野ごとに継承されてきた専門知と比べて、メンバーが流動的である分、逸失しやすく、離散しやすいかもしれない。だが、専門知と並び立つ可能性に開かれていると考えられる。

〈市井知〉：異なる生活の場をもつ人びとが直接向かい合い、そこ¹⁶の誰もが係わる問題をテーマに対等なやりとりをしながら学び合うとき、その経験を通してそれぞれに蓄積される知恵や知識

最後に、本論文における〈視座〉の定義を以下に示す。話者自身には「基準」でも、相手のそれは想像力を用いて察することしかできないので「立場」とした。

〈視座〉：話者の外界認識のもとになる基準/相手の外界認識のもとになる立場

〈視座〉は、常に合理的に考えているというわけではない誰もが、自分の感情の変化と相前後してその存在に気づくことが少なくないと思われる。たとえば、二つ折りのメモを男性Aから無言で手渡されて応答できなかった筆者は、あとで冷静になって互いの〈足跡〉を振り返ってみて初めて、彼の〈身体〉が自らと異なるふるまいをして当然なのにそのことを認識し損ねていたことに気づいた。詳しくは第4章で述べるが、男性Aとの出会いから筆者がその要素と判断した上述の〈足跡〉と〈身体〉とともに、主に視覚による認識に関わる〈風景〉と、主に聴覚による認識に関わる〈言語〉とを併せて、この論文でいう〈視座〉は以上の4つの構成要素からなるとする。4要素の2つずつを組み合わせた、全部で6つの外界認識の複合概念は、すでに文中で使用してきたことを付け加える。それらは、〈居場所〉、〈事情〉、〈情景〉、〈世界観〉、〈日常〉、〈経験〉である。

調査地概要

しばしば「エネルギーのまち」¹⁷と紹介される柏崎市は、東京からは直線距離で約220km、上越新幹線と在来線を使い柏崎駅まで約3時間、車なら関越・北陸自動車道で柏崎ICまで約3時間30分である。駅からアーケードのある商店街を抜けて突き当りの中央海水浴場に

立つと、海の向こうに佐渡島、左手に霊峰米山、右手に原子力発電所が見える。自動車部品のリケンと菓子のブルボンの本社がある。主産業は、地元の油田の掘削や石油生産などに関連する装置や部品を供給したことから始まったとされる機械・金属加工業である。

1969（昭和44）年3月、現地視察などを行った超党派の議員団による報告をうけて柏崎市議会が、原子力発電所の誘致決議を多数決で可決する。その年の9月に東京電力は世界最大の7基の原子炉からなる発電所の建設計画を発表する。建設着工は1978年、7号機が営業運転を開始したのは1997（平成9）年である。1990年代終わり、市内では通常の燃料より危険性が高いとされるMOX燃料の賛否を問う住民投票をもとめる署名運動が行われた。住民投票の直接請求は市議会に退けられる。だが、2002年東京電力のデータ隠し事件を受けて、市議会はその利用を認めない決議をしている。翌年、「地域の会」が設立された。

2007年7月16日、マグニチュード6.8の中越沖地震により、市内中心部では家屋倒壊などの被害を受ける。自動停止した原子力発電所からの放射能漏れは限定的だったが、液状化現象のため構内に段差ができ、設備が損傷し、電源盤を火元とする火災が発生した。

2011年3月、福島第一原子力発電所で過酷事故が起こり、政府が周辺地域に避難指示を発出する。柏崎刈羽発電所では原子炉が順次定期検査に入り、2012年3月に出力がゼロになる。2013年7月、新たな規制基準のもとで、東京電力は6、7号機の安全審査を国に申請する。2015年6月、柏崎市議会が発電所の早期運転再開に関する請願を採択した。東京電力は、現在、安全審査の過程で明らかになった6、7号機の液状化対策工事を進めている。

先行研究のレビュー

柏崎に関する先行研究を次の4つに分けて検討した。1つ目は「地域の会」に関するもの、2つ目はここ数年間の地元の原発についての住民の意見分布に関するもの、3つ目は原発立地自治体としての成り立ちとその特徴や地域史に関するもの、そして、4つ目は、マス・メディアによる市井の人びとの言論・活動についての報道に関するものである。

だが、先行研究は、政治家を含めた「大きな声」の持ち主をこの地域の言論・活動の主体とするものがほとんどであり、本論文で取り上げる市井の人びとによる「発話」に関わるものは、いくつかの例外を除き、見あたらない。他方、筆者が見聞きしたことから理解したような、地元の原発を話題にすることの困難さを乗り越えて証言することを一般的に説明するような理論や政治文化に関する研究は、筆者の知る限り、見あたらなかった。

「発話」試論を組み立てるといふアプローチ

本論文では、アーレントの「活動」についての議論を日本という文脈で変奏した「発話」試論を組み立て、地元の先人から引き継がれた「発話」に関連する柏崎に特有な事柄を明らかにしてから、3.11後の証言を説明するという方法をとる。手順としては、第1に、「発話」の第2定義の前半部の「対等なやりとり」の条件をさぐる。この場合、「せめぎ合う意志と意図」のせいで「複数の人間」による活動が言論と相伴うことはほとんどないといふアーレントの議論（Arendt 前掲, 184）に注目して、日本という文脈で話者と相手の対立を避けるための経験則を分析することが含まれる。第2に、後半部の「互いの異なりから学び合う」条件をさぐる。この場合、言論は「生きている身体」という存在性につながれているといふアーレントの議論（Arendt 前掲, 183）から、話者がいったんは言論を放棄してからのちに「発話」を成立させる事例に注目して、「発話」の第1定義の「見つける」といふ主体性の発動の差し支えが何だったかを振り返って語るときの言葉に耳を傾けることが含まれる。第3に、言論・活動を促進/抑制する柏崎に特有な要素をさぐる。この場合、地元で規範とされることを「原発のあるまち」といふ文脈の始まりである1969年以降に為政者が作り出した言説からさぐることが含まれる。ここまでで、言論・活動を抑制する特定な要因を押しえたうえでそれに対応した結果として「発話」が成立するまでの過程を、日本（そして柏崎）という文脈の「発話」試論として示したことになる。最後に、3.11後の柏崎の公の場でのいくつかの発言を取り上げて上記の試論に基づいて検討し、なぜ彼/彼女が「発話」に至ったのかを明らかにする、という研究のアプローチになる。

本論文の方法

本論文の研究方法は、資料・文献調査、現地調査、量的調査の3通りである。

章立てと内容

第I部（第1章～第5章）では、アーレントの活動論を骨組みに日本という文脈で「発話」試論を組み立てる。第II部（第6章、第7章）では、原発のある（日本のなかの）柏崎という文脈から影響を受ける人びとに特有な「発話」を促進/抑制させるような言葉を、その文脈の始まりの1969年前後の為政者や事業者などの言説にさぐる。第III部（第8章、第9章）では、3.11後の柏崎の一部の人びとによる公の場での発言を取り上げて、第I部で論じた「発話」試論に基づいて説明する。最後の終章は、この論文の結論部である。

第1章 「発話」が成立するときのテーマとその結果

言論・活動についてアーレントが論じるときの用語のうち「政治的なもの (the political)」と「政治権力 (power)」¹⁸について、『人間の条件』のテキストを次のように読み解いた。「政治的なもの」とは、制度政治に関する事柄に限定されない、話者と相手のあいだで「言論の適切さ (the relevance of speech)」が問題になるテーマである。本論文でいう「発話」が成立する場合、「政治的なもの」はそのテーマに当たる。他方、「政治権力」とは「市井という基盤 (the foundation of cities)」に基づき、「活動することが言論することと相伴う複数の人間のあいだの現れのための可能性の空間を存在させておくもの」である。「人びと (people)」は「他の人びと (other people)」といっしょにいて初めて「複数の人間」なので、「他の人びと」とみなす相手の「発話」が成立することに私 (たち) がその場を開いておく働きが「政治権力」である。したがって、通念を優先して慣行に従いがちなふだんのやりとりとは別に、<いま・ここ>の問題である「可能性の」政治に望むことをテーマに私 (たち) が「発話」を成立させるとしたら、このような「政治権力」を生み出し維持する方法を、自分 (たち) で理解し継承する必要があると論じた。

第2章 「発話」が成立する以前に挫折させること

アーレントは、「直接に複数の人間のあいだで進む事柄すべて」の不確かさは、彼女を含めた「私たち」が「活動と、複数の人間がその結果いっしょにいて交流することを挫折させる多くのこと」に対応しようとする最初のものにすぎないという (Arendt 前掲, 182)。そして、「複数の人間は自分たちを主体として、つまり、異なる唯一な複数の人物として、開示せざるを得ない」という (Arendt 前掲, 183)。このように不可避だが容易ではないのは、この論文でいう「発話」の成立である。ただし、「発話」以前で挫折させることは、「核の時代」の同時人でも、文化ごとに異なっていて不思議ではない。そこで、ふだんの活動——ある目的の手段であり、その結果功績の一種になる——ではない、「人間らしい複数性」のもとで言論と相伴うことだけを目的にした「活動」についてアーレントが論じたテキストを読み解き、文化ごとの変奏以前の私 (たち) を挫折させることの2つの手がかりを抽出した。その手がかりとは、「複数の人間」がいっしょに生きる場に「すでに存在する人間らしい関係の『網の目』」にある「せめぎ合う意志と意図」と、「複数の人間」の各々の言論が「生きている身体」の存在性につながれていること、の2つである。

第3章 「せめぎ合う意志と意図」の早期解消を目的にする活動

「せめぎ合う意志と意図」のせいで「複数の人間」による「活動」がほとんど成立しないとアーレントがいうことを、日本という文脈で考察した。話者と相手の複数の意志と複数の意図のあいだを「対等なやりとり」で調整できれば、「発話」の成立に向かうはずである。だが、私（たち）は、単一な意志そして/または単一な意図が自分に劣位/優位になる状況をつくりだして「発話」以外の活動を行うことが少なくない。このような活動は、日本という文脈で「人間関係がうまくいくということ」を目的にする経験則として身近なものである。そこで、意志と意図の複/単によって「対等なやりとり」にしない状況を5通り——優柔/陰悪、忖度/説得、遠慮/動員、服従/命令、順応/妥協——に分けて説明した（図1）。この他にも、自分たちを他の集合体から分けるために活動をその手段にした（日本のあるいは地元の）先人の言葉や行動をもとにする慣用句や慣例などは少なくない。

第4章 「生きている身体という存在性」につながれている言論

言論は「生きている身体」という存在性につながれているとアーレントはいう。「すでに存在する網の目」の「可能性の」働き、「主体性」の働きとともにこの論文では、彼女は示唆するにとどめたく感受性>の働きも「発話」の成立を左右するとした。筆者自らの「発話」失敗・成功例の考察から、『人間の条件』のプロローグに出てきた「近代世界疎外」とそれに相応する「地球から宇宙へと世界から自己への二重の逃避」（Arendt 前掲，6）を、次のように読み解いたからである。「核の時代」の現実からの各々の認識による「疎外」と「単一風景」を見ている状況そして/または「単一言語」を聞いている状況、というようにである（図2、図3、図4）。以下に示すのは、話者の外界認識に関する諸概念である。

1. 外界認識の基本の4要素

＜風景＞を見ている時間

＜言語＞を聞いている空間

＜身体＞を察する感覚

＜足跡＞で辿る記憶

2. 4要素を2つずつ組み合わせた複合概念の6種類

＜日常＞： ＜風景＞＋＜言語＞

- <経験>： <身体>+<足跡>
- <世界観>： <風景>+<身体> (<風景>に関わる理想に見えるもの)
- <居場所>： <言語>+<身体> (<言語>に関わる規範とされるもの)
- <情景>¹⁹： <風景>+<足跡>
- <事情>： <言語>+<足跡>

3. 外界認識の5相²⁰

- <視野>： <風景>+<言語>+<身体> (<足跡>を行き来すれば<視野>が広がる)
- <視点>： <風景>+<言語>+<足跡> (<身体>を動かすと<視点>が新たになる)
- <無意識>： <風景>+<身体>+<足跡> (それぞれを言語化すると認識が変わる)
- <先入観>： <言語>+<身体>+<足跡> (<風景>に出会うと<先入観>が消える)
- <視座>： <風景>+<言語>+<身体>+<足跡>

ここから述べるような手順で、<感受性>の認識と感情の2局面が「発話」の成立を左右する仕組みを明らかにした。まず、失敗例を分析して、<足跡>を除く外界認識の3要素の複/単の各相に伴う感情の諸相を整理した(表2)。次に、成功例では、<情景>をめぐる感情の変化で沈黙した時点の諸相(表4)からもととの<世界観>そして/または<居場所>を見直すと<視座>が展開したことを説明した。**情況**の「複数性」の認識が欠けた3相では、凝縮した認識と感情に言論はつながれたままだが(図5)、**情況**の「複数性」を察する<対話>の姿勢になれば、「安/喜」の感情を伴い「発話」に至ると論じた(図6)。さらに、相手の言葉に対する違和感と距離感という別々の経路から話者の<視座>が展開して4タイプの「発話」——<世界観>の異なりから相手がノイズとみなした事実を示す「反論」、相手との<居場所>の重なりを表現する「応答」、相手から見えにくい<事情>を開示する「現出1」、自分(たち)の<情景>を表現する「現出2」——が現われることを説明し、独自の積木型モデルを用いて先の2通りの経路を検証した(図7、表7)。

以上のように前章と本章で整理した「発話」試論は、アーレントの「活動」についての議論を日本という文脈で話者と相手のいる**状況**と各々の**情況**に分けて、前者については一般的な経験則を取り上げ、後者については限られた事例²¹を分析して、補角的に組み立てたものである。この試論によれば、話者と相手が「対等なやりとり」をする**状況**を整える

とともに、各々の**情況**——認識と感情の2局面からなる——を押さえてそれに対応して「互いの異なりから学び合う」ならば、その場にいる第3者が見ても「安/喜」の感情とわかるような様子や表情とともに、両者のあいだの〈いま・ここ〉の問題をテーマにして、自己開示的な表現がその内容の特徴であるような「発話」が成立すると論じた。

第5章 筆者を相手にした柏崎の人びとによる「発話」事例

この章では、柏崎で筆者が見聞きしたことや、地元の人びととの「発話」が成立した事例を取り上げて、地元特有な要素を「発話」試論を用いて読み解いた。まず、大勢が「サイレント」という**状況/情況**の背景には、〈単一居場所〉という認識の神話を支えるためのマナー、たとえば、「柏崎では原発に関する個人の意見はふつう人前では話さない」と、推進側と反対側による別々の〈世界観〉という認識の現われ——2015年頃の標語ならば「原子力発電所の正常化」と「即廃炉」——のせめぎあいが、同時に存在すると論じた。

次に、筆者を相手に「発話」を成立させた柏崎の人びとが、それ以前を振り返って自己開示的に表現した3つの事柄について次のように考察した。第1に、慣用句「ひとのあと」を女性だけが規範とする経緯を調査したが解明には至らなかった。第2に、原発についての語りに出てくる「怖」の感情表現は、〈日常〉という認識に亀裂をもたらす不安と〈身体〉という認識に震動をもたらす不安の2側面があると考えられる。第3に、筆者について「縁がある」と人びとが断定するときの「縁」は、血縁、地縁とは異なり、アーレントのいう「人間らしい関係の『網の目』」に関連している。この触知できない「縁」は、自分とは異なる〈世界観〉を遮る「遮蔽物」が消えると見つけられる〈識縁〉と、〈単一居場所〉を囲む「壁」が消えると見つけられる〈声縁〉からできていると考えられる(図8)。

最後に、地元の人びとを相手に「発話」を成立させた筆者が、それ以前を振り返って自らの「遮蔽物」や「壁」について省察し、柏崎についてノイズとみなしていた事実や思い込んでいた事柄のいくつかを述べた。話者と相手との学び合いが「発話」だからである。

第6章 日本政府と電力会社が更新する「核エネルギー」言説

本章と第7章からなる第II部では、少なくない柏崎の人びとが口にする「地域振興のため」という原発についての標語や地元で規範とされる行動を示す言葉について、その始まりを市長の小林治助が原発誘致に言及し市議会が誘致決議を行った1969年前後にさかのぼり、当時の国レベルの「核エネルギー」言説と地元の為政者による発言にさぐった。

この章では、「平和のための核 (atoms for peace)」を「核の平和利用」と読み替えた日本政府と電力事業者による「核エネルギー」言説の変遷のなかで、1969年前後の断面を明らかにした。1970年頃には、「平和」よりも「利用」に重心が移り、被ばくを伴うその「質」を約20年前に問題にした学者は学术界で異端とみなされていたこと、小林市長が立地自治体の安全や環境を重視するように中央に要請したが叶わなかったこと、その中央では、被ばくを伴う本来の「質」を事業者が「核アレルギー」と揶揄する一方で、政府が「公害の時代」や「安価な電力」という文脈を導入してその「質」の意味を変えたことを論じた。

第7章 原発誘致時の為政者が示した柏崎で規範とされる行動

前章で述べた中央の「核エネルギー」言説の変遷とは別に、柏崎では少なくとも2つの言説——誘致決議を支持した市議が1969年に述べた、政府、専門家、お互いを「信頼」する、そして、小林市長が1979年に述べた「市民が一体となる」——が生まれていた。1971年の市長選では、前者の「信頼」言説の受容/拒否が争われた一方で、多くの有権者は原発を「景物」化する傾向が見られたという。とはいえ「信頼」言説は、住民代表が原発に関する情報について専門家を質す「地域の会」に継承されたと考えられる。後者は、柏崎のあるべき姿を小林市長が表現したものと考えられる。だが、のちに会田前市長が「市民の力が1つになることへの期待をほのめかした[会田 2016]のと同様、第5章で取り上げた暗黙の了解としての「人前では話さない」マナーを助長するような副作用があると論じた。

第8章 「柏崎というまち」について「発話」に至った人びと

本章と第9章からなる第III部では、2014年からの5年間に柏崎で筆者が見聞きした限りで、〈いま・ここ〉の問題をテーマにしていると判断できる公の場での複数の人びとによる発言を取り上げ、第I部で整理した試論を用いて「発話」であることを同定した。

この章では、前市長の会田洋、市民団体「くらしをみつめる・・・柏桃の輪」の歌代勝子、エッセイ「ひばり」の柴野裕治、脱原発集会でスピーチをした女性、市長選挙への初出馬を公表して座談会などを開いた竹内英子による発言を中心に検討を加えた。より強めに現われている特徴によって各事例を「発話」の4タイプに分けて、「反論」、「現出1」、「現出2」、「応答」の順に取り上げた。市内の意見分布で反対側が初めて優勢になった選挙後の出口調査の結果は、事故の起きる可能性に「みんなで向き合」うことから始める[2016b 竹内]という竹内候補の訴えに一定の有権者が「応答」したからではないかと論じた。

第9章 地元の原発を案ずる人びとと市長との意見交換会

市長の桜井雅浩が「拡大版『地域の会』」と呼んだ、市史上初の「原子力発電所に関する意見交換会」（2018年3月18日）において、同じテーブルを囲んだ異なる生活の場をもつ参加者の一部の発言を取り上げ、彼/彼女が〈いま・ここ〉の誰もが関わる問題をひとつひとつよそごとにしないことから「発話」を成立させたことを示した。注目したのは、推進派の1人のこのような会は不要という発言をひとつごとにせず、「地域の会」の司会を長く務めた経験から〈市井知〉の一端——「常日頃の仲間でない方の意見をきちんと聴く」、そして「もともとの根拠・情報」とのちがいを考慮した上で発言する——を開示した新野良子と、推進派といっしょに暮らす地元のことをよそごとにせず、「柏崎というまち」を案ずる誰もが関心のある論点——土地、飲み水、経済、風向き——を提示した反対派の4人である。

終章 「発話」：〈いま・ここ〉の問題を案ずる人びとの〈市井知〉の実践

研究の目的に立ち戻り、3.11後の柏崎の一部の人びとが「発話」の成立と同定できる言論・活動を行った理由について、原発に関する何かからそのテーマをずらすことによって「発話」の成立が連なることを期待したからと論じた。エッセイ「ひばり」に「全部、テーブルの上にあげて」という思いを込めたと柴野は語った（2014年9月3日）が、相前後して、「柏崎というまち」の多彩な文脈を提示する人びとが現われたからである。

以上のことは、「柏崎における原発」という筆者の〈先入観〉が消えて初めて分かったことである。そこで、〈視点〉と〈視野〉についても省察した。それを断つと人間らしくいられないとアーレントがいう「initiative」を主体性と感受性の両面から読み解いたのは、メモ手渡し事件後に得た〈視点〉に導かれたからである。他方、筆者の〈視野〉から外れていた事柄は、たとえば「背を向ける」のように言葉は本来、複数の〈身体〉が係わって引き継がれるものなのに、単なる記号としがちな私（たち）の場合、言論がつながれている「生きている身体」は、便利で快適な日常につながれている、といえることである。

現在、「核エネルギー」を始め、複数の〈身体〉が係わって吟味すべき言葉は少なくない。吟味には、それを案ずる市井の人びとによる「発話」の成立が不可欠である。柏崎ではすでに実践者が出ている〈市井知〉について私（たち）はほとんど知らない。そこで、〈市井知〉の実践と継承のためにその肝である3要素を、いっしょに始める（initiative）、たがやす（culture）、支え合う（action）と表現して、「発話」試論の知見から説明を試みた。

-
- ¹ デジタル大辞泉によれば、「やりとり」には以下の3つの意味があり、言論・活動の領域と物質に関わる領域の両方の文脈で使う語である。「①物を取りかわすこと。交換」「②杯をかわすこと」「③言葉の受け答えをすること。また、口論すること」の3つである。
- ² 「われわれ」と後段で使用した「みんなのおのおの」の使い分けについては、宮沢賢治の詩集『春と修羅』の「序」から着想を得た。その詩の文脈を踏まえてこの論文で次のように援用する。「われわれ」とは、「われ」と「われ」にあたかも差異がないかのような集合体を、慣習的に表す語である。他方、1人ひとり異なる「おのおの」がいっしょに生きるという現実をそのまま指し示す語が「みんなのおのおの」である。
- 賢治は『春と修羅』の「序」で「わたくし」という代名詞を選び、「たち」という接尾語がつく「私」も複数代名詞の「私たち」も用いていない。先の2つの語を対比させるために、「私」「私たち」をあえて用いなかったというのが筆者の解釈である。
- ³ 「サイレント」と表現したのは柏崎の50代の男性Hである。詳しくは第I部で述べる。
- ⁴ 日本国語大辞典 第二版によると、「市井」とは「(昔、中国で、井戸のある所に人が集まって市が成立したところから)人の集まり住む所。まち。いち。ちまた。また、そこに住む人」である。専門知と親和性が高い「在野」は、公職につかず民間にあることを意味する。
- ⁵ 第20回(平成25年度)小諸・藤村文学賞の一般の部で最優秀賞を受賞したエッセイ「ひばり」は、2014(平成26)年7月に小諸市のHPで公開された。島崎藤村の名を冠したこの文学賞を主催する小諸市のHPのうち、2020年4月8日現在、以下のURLで公開されている。この論文の最後に、文学賞の事務局の承諾を得て、附録としてその全文を転載するとともに筆者による英訳を掲載する。
- https://www.city.komoro.lg.jp/official/kanko_sangyo/kanko/rekishu_bunka/2/3413.html
- ⁶ 本論文の〈いま・ここ〉の定義、そして、タイトルの一部であり文中の後段に出てくる「発話」の定義は、序章で述べる。
- ⁷ 日本国語大辞典 第二版によると、「案ずる」には3種類の意味がある。「①あれこれと考えをめぐらす。心中いろいろと考える」「②物事の成り行きなどをあれこれと心配する」「③はっきりしない点を問いただす。調べる」である。もともとは、③だけだったという。そこで、この論文では「案ずる」を、3種類の意味を含む語として多義的にとらえる立場を取る。
- ⁸ この論文で「私(たち)」と表記する場合、筆者自らを含めた複数の互いに異なる「私」がいっしょにいる、ということの意味する。「われわれ」ではない。
- ⁹ 一例は、Bulletin of the Atomic Scientists による「The Doomsday Clock(世界終末時計)」である。その時計によると、2020年1月現在、100秒前なのだという。
- <https://thebulletin.org/doomsday-clock/>
- ¹⁰ デジタル大辞泉によれば、「創発性」とは、「要素間の局所的な相互作用が全体に影響を与え、その全体が個々の要素に影響を与えることによって、新たな秩序が形成される現象」。
- ¹¹ 「わざ」とひらがなで表記したのは、技と業の2側面があるからである。
- ¹² 2015年9月26日の新潟日報で引用されたコメントで元市議の今井元紀は、地元の原発に対して「みんなが本音では触れたがらない」という見方を語っている。以上のコメントは、この論文の第5章で引用する。他方、同じ章で取り上げる筆者が見聞きした事例は、仲間内では本音を話すが、意見が異なるのではないかと警戒している相手に対しては本音では触れたがらない様子を示唆している。今井のいう「みんな」とは、「全員」ではなく「他人や他の人びとがいることを前提とする人前」を意味しているのかもしれない。この論文の第III部で取り上げる公の場での事例は、「みんなのおのおの」として自己開示的な「本音」が語られていると説明できるものである。
- ¹³ 「国境なき医師団」看護婦の白川優子の言葉。朝日新聞による国際貢献をテーマにした

インタビュー記事のうち、以下の最後の段落からの引用（2020年1月9日朝刊）。

「世界で、SNSを通じて平和への思いを発信する人が増えているし、紛争地で現地の人と接すると、政府のレベルでは対立があっても、市民レベルの交流は続いていた。違いを認め合う人と人との交流が、『戦争ってよくない』という意識を生んでいく。心のつながりって、本当は強いから」。

¹⁴ この部分は、政治学者 石田雄による論考に多くを負う。この国の政治文化における「同調」と「競争」の複合に焦点をあてて近代日本の発展の連続と変化を説明した、学生紛争の時代を背景に書かれた『日本の政治文化 同調と競争』（石田 1970）を参照。

¹⁵ 「誰もが」は、第 III 部で事例として取り上げる「柏崎刈羽のお母さんからのメッセージ」の「1人ひとりが自分にできることをしていくことで、誰もが安心して暮らせる平和な世の中に少しずつ変わっていくと信じています」という語りから着想を得た。

¹⁶ 言語学者の大野晋は、「日本語の代名詞の特徴は、コソアドの体系をもっていること」であり、「人間を親と疎で区別」するという傾向、いわゆる「ウチ・ソトの意識」がそこに表れているという。ソ系の代名詞は以下のような意味をもつという（大野 1978, 73）。

『そこ』『それ』『そなた』というソ系の代名詞は、すでに知られているもの、『我』と『汝』とが共通して知っているものを指す。文脈でいえば、すでに先に示されているものを指示する役を持っている」。

この論文では大野の説を踏まえてコソアドことばを使う。「みんなのおのおの」にとって共通の問題が、「みんな」の範囲があいまいなためにほとんどが「発話」に至らない場合、「そこ」の問題ということで、「共通して知っている」だけでなく、その問題を案じている「みんな」の範囲を再認識できると考えられるからである。

¹⁷ 2016年12月に柏崎市長に就任した桜井雅浩は、2018年3月に「地域エネルギービジョン～新たなエネルギーのまち柏崎3.0へ～」をまとめている。市のHPの次のURLを参照。
https://www.city.kashiwazaki.lg.jp/sangyo_business/energy/energyseisaku/13664.html

¹⁸ 千葉眞は日本語の「権力」のニュアンスに触れ、注釈の中で以下のように苦言を呈する（千葉 2000, 226）。本論文では、この点を踏まえて「政治権力」と訳する。

「おそらく日本語の語感からすると、アーレントの“political power”の概念は、「政治権力」よりも、「政治的力」と訳した方が適切であるとの見解もあるだろう。というのも、日本語の「権力」のニュアンスは、英語の“power”よりもはるかに狭く、支配権力と同一視されて理解される傾向があるからである。しかしながら、日本語の「力」では、英語の“power”のもつ政治的含意が十分に表現しきれないという難点がある。それゆえ、ここでは「政治権力」という訳語を一貫して用いることにした。しかし、どちらの用語を訳語として採用しても、難点は残ることを指摘しておきたい」。

¹⁹ 「情景」は、元沖縄県知事大田昌秀の以下の言葉から援用した。「人間がまるで木の柱が焼け焦げたようなですねそういうかっこでいくつもいくつもその折り重なってですねおったわけですね。この情景っていうのは私にとってはもう一生忘れれることのできない状況ですね」。NHKアーカイブスにEテレで放送された大田の生涯を振り返る番組「あの人に会いたい」の短縮版がある。沖縄戦を学徒動員で経験した大田が、当時のガマを訪れたときの肉声を聞くことができる。映像からはその訪問時期は明らかではない。

http://www2.nhk.or.jp/archives/jinbutsu/detail.cgi?das_id=D0016010512_00000

²⁰ この項目の（）内のコメントは、5番目に出てくる〈視座〉から欠けている要素を補うときに各相で起こる変化について説明したものである。外界認識の諸相は、適宜、刻々と入れ替わると考えられる。

²¹ ドキュメンタリー「見えない壁」の登場人物による複数の発言を取り上げて、4つの「発話」タイプに分けて説明した。その結果はこの論文の最後に附録として掲載する。

図1 対等なやりとりをしない場面の「活動」の特色

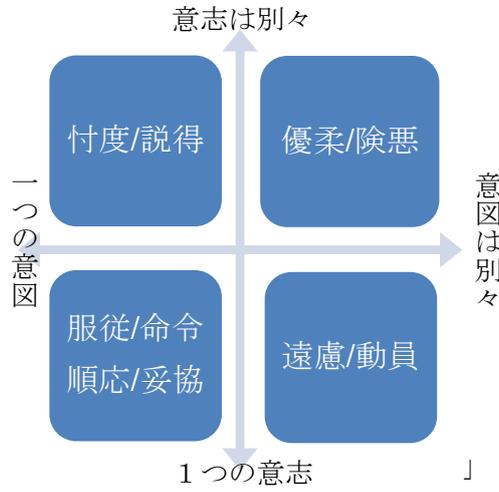


図2 複数の「風景」から「単一風景」への逃避 (地球から宇宙への逃避)

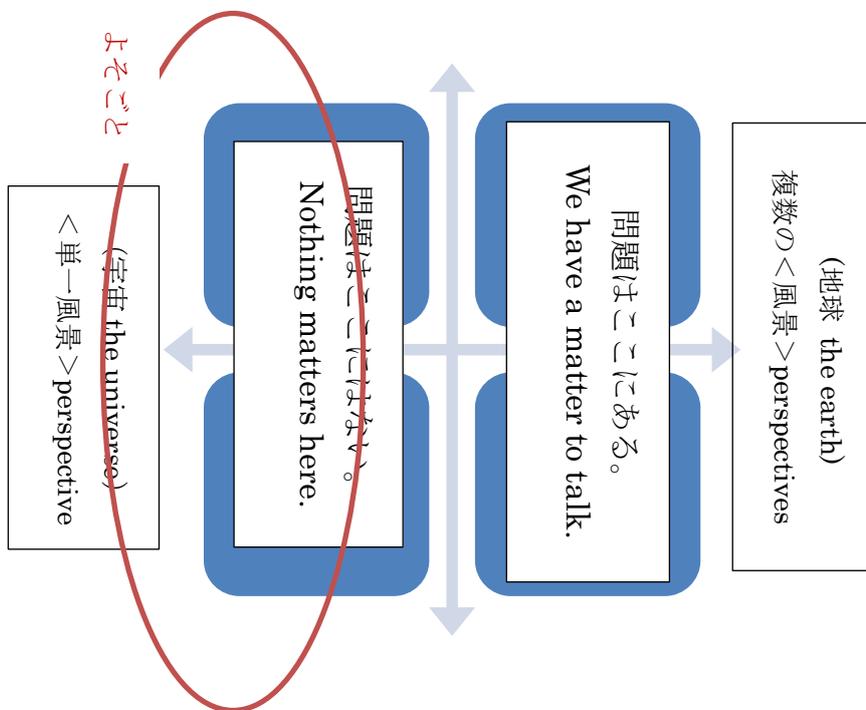


図3 複数の<言語>から<単一言語>への逃避 (世界から自己への逃避)

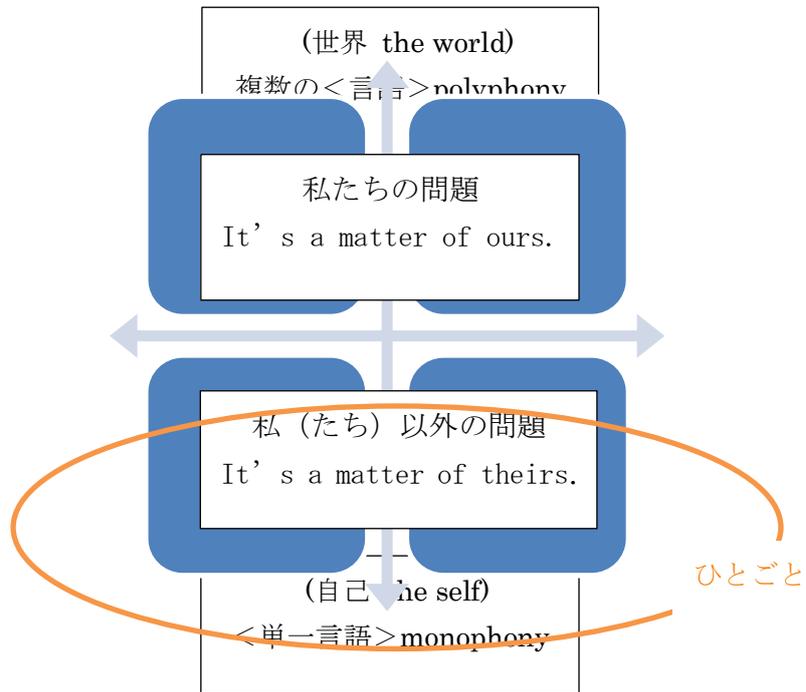


図4 <いま・ここ>の問題についての話者の認識の傾向の4象限

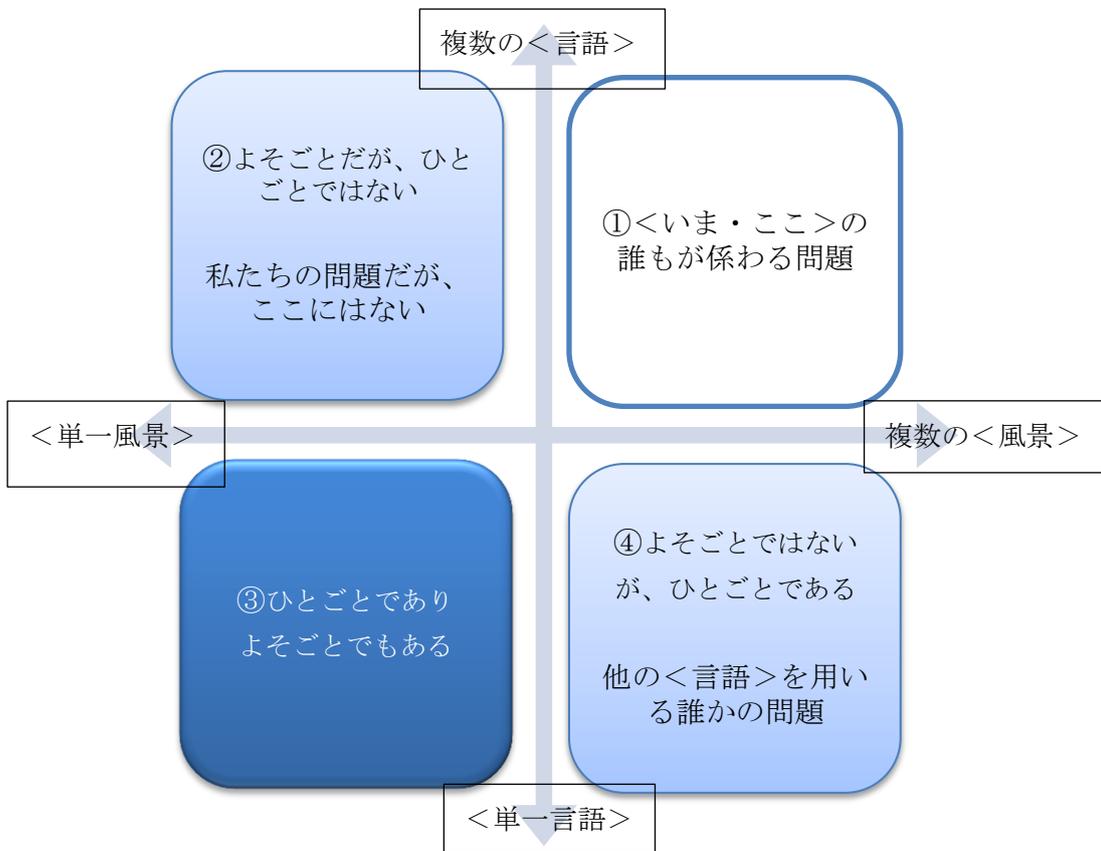


表2 ある局面で沈黙した筆者の感情の諸相

風景							
		単		複			
身体	複	怒	わだかまり	—		複	言語
		怖	気遣い、気後れ、 たじろぐ	哀/恥	*悲しい/気恥ずかし さ、*恥ずかしい	単	
	単	厭	あきらめ、苦笑い、 とまどい	昂	あせる	複	
		<単一視野>		驚	あきれる、*はっと	単	

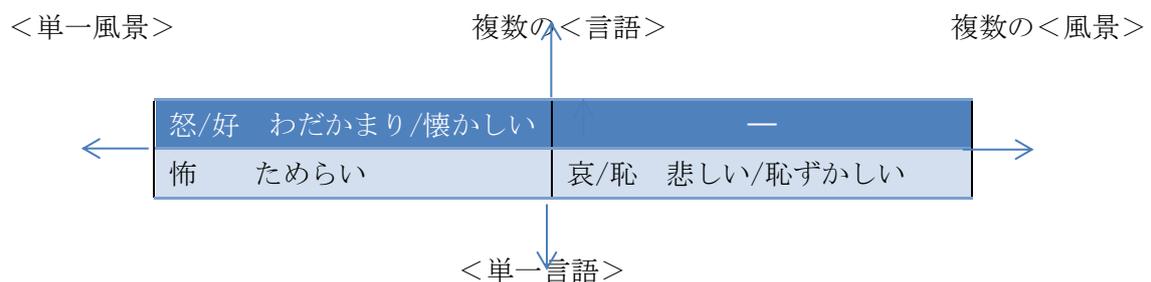
*「悲しい」「恥ずかしい」「はっと」については「発話」成功例のときに説明

表4 <情景>をテーマに沈黙した筆者の感情の諸相

情景（風景+足跡）							
		単		複			
身体	複	*好	懐かしい	—		複	言語
		怖	気がかり、たじろぐ	恥	恥ずかしい	単	
	単	厭	ぞうっとする	昂	もどかしい	複	
		<単一視座>		驚	どぎまぎ、あっと	単	

*「好 懐かしい」は、「ひばり」（柴野 2014）の読者の感想を聞いた筆者の推察

図5 「発話」の成立以前に相手に対して発言する話者の認識と感情の関係



注 表2、表4、図5において、「人間らしい複数性」に条件づけられた状況で「発話」に至る場合の「安喜」タイプの感情の相はそのどれにも現われていない。

図6 出会った相手に対する話者の姿勢の4象限

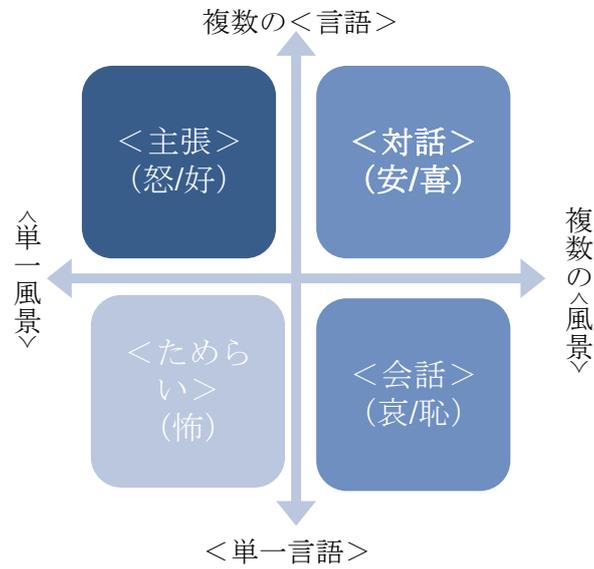


図8 「発話」の成立した話者と相手の姿勢と<識縁><声縁>との関係 (第1象限のみ)

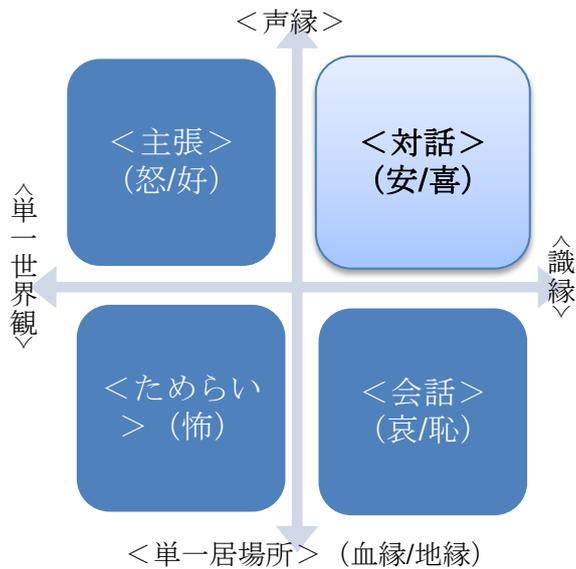
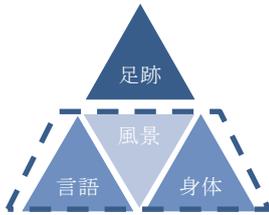


図7 「サイレント」から「発話」までの3段階、2通りの経路図

1) <日常>という認識の話者が相手と出会うとき複数の<身体>により言論が抑制される
 身体(複) + 言語(単) 風景(単) 動揺(抑制) ㊦ → <ためらい>の姿勢で押し黙る

2-1) 相手の<言語>に対する違和感
 言語(複) 身体(複) + 風景(単) 足跡(単)

2-2) 相手の<風景>との距離感
 風景(複) 身体(複) + 言語(単) 足跡(単)



㊦ > 窓/好 動揺(促進) 窓/好 > ㊦

㊦ > 恥/哀 動揺(促進) 恥/哀 > ㊦

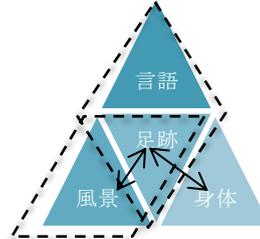
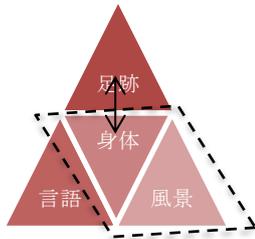
↓
 自分の<情景>に制約された
 <視点>から発言 ↓
 <主張>の姿勢の(よそごと)発言

↓
 自分の<事情>に制約された
 <視点>から発言 ↓
 <会話>の姿勢の(ひとごと)発言

3-1) 違和感の理由を<経験>に照らして
 吟味すると、各々の<世界観>から外れる
 事実はサウンドと捉えていないようだ
 (言語+身体+風景+足跡) × 2

3-2) 距離感の理由を<情景>に照らして
 探ると、各々の<居場所>から見える
 <風景>しか見えていないようだ
 (風景+身体+言語+足跡) × 2

どちらも、複数性にかかれた<対話>の姿勢で「発話」に至る



応答責任 > ㊦

応答責任 > ㊦

「遮蔽物」のせいでお互いが偏向していると仮定し、<世界観>の異なりを知り合う

お互いの<居場所>を仕切る「壁」があると仮定し、「壁」の内側を意識する

3-1-1) 自分には聞こえたが、相手は
 ノイズとみなした事実を知らせる

3-2-1) <足跡>を入れて<居場所>の
 しぼりをほどこき、<事情>を表現する

3-1-2) 「発話」に至った相手に対し
 て自分の言葉で応答する

3-2-2) <足跡>を入れて<世界観>の
 しぼりをほどこき、<情景>を表現する

表7 「発話」の4タイプと筆者の例の布置
 (図7の 3-1-1) から 3-2-2) に対応)

応答責任 を感じる相手	聞こえてくる相手の<言語>への違和感の原因をさぐる	別の<風景>を見ているように思う 相手との距離感の原因をさぐる
話者自身/ 特定な誰か	1-1) <居場所>をつくる	2-1) <事情>の複数性
	話者と相手が<世界観>の異なりを知り合う「発話」	話者が自分と相手の<足跡>をきつ戻りつする「発話」
	<世界観>の異なりのせいで、自分にはサウンドに聞こえたが、相手はノイズとみなした事実を示す	「壁」の向こうの相手は知るのが難しい、自分(たち)の<居場所>の<事情>を明らかにする
	相手がノイズとみなした事実を補角的に表現する「反論」	<事情>を表現する「現出1」 (呼びかけ)
	例：—	例：筆者：7.16の調査、(消毒液とガーゼと絆創膏を)「ありがとう」
話者自身/ 特定な誰か/ 不特定な誰か	1-2) <世界観>を押さえる	2-2) <情景>の複数性
	話者と相手が<世界観>の異なりを知り合う「発話」	話者が自分と相手の<足跡>をきつ戻りつする「発話」
	聞き逃していた事実を知り、<世界観>のしぼりに気づいたことを、<居場所>が重なる相手に伝える	自分(たち)の<世界観>のしぼりのせいで目を塞いできた自分の<情景>を、相手に表現する
	相手の「発話」に応える「応答」	<情景>を表現する「現出2」 (巻き込み)
	例：筆者 7.16の調査	例：筆者 電源車について語る